

# 教育・研究等業績一覧

履 歴					
フリガナ	タマキ ユタカ	所 属	保育学科		
氏 名	玉 木 裕	身 分	教授		
学 歴					
年 月	事 項				
1984年4月	北海道教育大学 教育学部 釧路分校 中学校教員養成課程（音楽） 入学				
1988年3月	北海道教育大学 教育学部 釧路分校 中学校教員養成課程（音楽） 卒業 学士（教育学）				
2000年4月	北海道教育大学大学院（札幌・岩見沢校） 教育学研究科 教科教育専攻 音楽教育専修 入学				
2002年3月	北海道教育大学大学院（札幌・岩見沢校） 教育学研究科 教科教育専攻 音楽教育専修 修了 修士（教育学）				
職 歴					
年 月	事 項				
1988年4月	北海道夕張北高等学校 教諭				
1993年4月	北海道稚内高等学校 教諭				
2002年4月	北海道石狩翔陽高等学校 教諭				
2013年4月	北海道女満別高等学校 教頭				
2015年4月	市立函館高等学校 教頭				
2017年4月	北海道札幌あすかぜ高等学校 副校長				
2019年4月	北海道札幌西陵高等学校 副校長				
2021年4月	北海道新得高等支援学校 校長				
2022年4月	拓殖大学北海道短期大学 保育学科 教授 採用 現在に至る				
教 育 業 績					
1 担当授業科目（2022年度）					
科 目 名	出講場所	期別	曜日	時限	備 考
保育実践演習	204 教室	前期(通年)	火	2	
保育実習指導Ⅱ	302 教室	前期	火	3	担当者複数
キャリアスキル	302 教室・パソコン室	前期(通年)	火	5	担当者複数
ピアノ表現Ⅰ	ML 教室	前期(通年)	水	2	担当者複数
ピアノ表現Ⅱ	ML 教室	前期(通年)	木	2	担当者複数
教育実習指導（1年）	302 教室	前期(通年)	金	3	担当者複数
教育実習指導（2年）	302 教室	前期(通年)	金	4	担当者複数
専門研究	384 研究室	前期(通年)	金	5	
総合芸術		後期	月・金	5	担当者複数
専門研究	384 研究室・他	後期(通年)	月・金	5	(担当者複数)
教育実習指導（1年）	302 教室	後期(通年)	火	2	担当者複数
幼児教育の方法と技術	201 教室	後期	火	3	担当者複数
保育実践演習	102 教室	後期(通年)	火	4	
ピアノ表現Ⅰ	ML 教室	後期(通年)	水	2	担当者複数
キャリアスキル	302 教室・パソコン室	後期(通年)	木	1	担当者複数
ピアノ表現Ⅱ	ML 教室	後期(通年)	木	2	担当者複数
教育実習指導（2年）	302 教室	後期(通年)	木	3	担当者複数
保育・教職実践演習（幼稚園）	201 教室	後期	金	3・4	担当者複数

<p>2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>○現行授業の目標と教育効果</p> <p>現行授業の目標は、保育者を目指す学生が、人が人を育てることの意味を理解しながら、必要とされる資質・能力や保育を目指す上での課題を意識した学修を行うことに主眼をおいている。そして、その学修を通して、探究心と創造性を身に付けさせることを大切にする。学科やコースの授業目的を達成するため、毎回の授業の目標は、それぞれの科目の目標に到達できるよう、スモールステップを考えながら設定している。</p> <p>新しい学びは、決してゼロから生まれるものではなく、過去の自分の経験を通じた学びの中からつながりをもって形成されると考える。そのため、授業においては学生の過去の経験を引き出すように対話を重視する。つまり、学生からの発信（アウトプット）が多くなるような環境及び授業構成を意識して指導を行っている。</p> <p>また、分かりやすい講義とするよう、視聴覚機器を含めたICTの活用を図り、教材や資料等の精選を行いながら情報量をコントロールし提示している。</p> <p>○自己評価</p> <p>教育目標の設定においては教員間の連携も保たれ、学科やコースの授業目的をきちんと意識した構成となった。しかし、自分自身が担当の初年度ということもあり、教材や資料の提供において用意したものを時間内に利用できない場合も見られ、情報量のコントロールにおいて、精選の視点から今後の見直しの必要があると考える。</p>																		
<p>3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>○現状の説明</p> <p>どの科目においても、講義要項にある「目的と内容および到達目標」を明確に学生に意識させながら授業を計画している。しかし、学生の授業に関する経験値が異なるため、取り組む過程において要する時間が不揃いになる。そこで、足りない経験値を補うために、グループワークを用いながら他人の経験から自分の学びを引き出し、疑似体験として共有しながら学修を進めるよう心がけた。また、外部講師を可能な限りお招きし、机上だけではなく実践的な学びとなるよう心がけた。</p> <p>○改善への取り組み</p> <p>特に、上記の「現状の説明」にある記載内容を意識して取り組んだ科目として、「保育・教職実践演習（幼稚園）」があげられる。</p> <p>この科目は、幼稚園教諭や保育士の養成校にある「総まとめ」の科目として、最終学年の後期に置かれている。そのため、新年度（4月）から現場に出て働くことを意識し、より実践的な内容となるよう外部講師による講義を多く取り入れている。これまで学んできた科目の復習とその発展というねらいは、受講している学生もきちんと感じ取って学んでいた。それは、次のような授業アンケートの「授業の進め方の良かったこと」の質問項目での記述からも推測できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の保育者の体験談がとても就職後に安心する材料だった。</li> <li>・現場で働く先生方の生の声が聞けてとても勉強になった</li> <li>・内容が濃かった。毎回テーマが違って良い。</li> <li>・現場の先生からお話が聞けたこと。</li> </ul> <p>アウトプットの時間やグループワーク等の取組がスムーズに行えた一方で、講師の講義を聴いた後に感想や質問を行う習慣（発信力、コミュニケーション力）を身に付けさせることを意図的に行ったものの、例えば、授業アンケートの自由記載にある「講師の質問は、ある人がやれば良いと思います。」のように、それらに慣れていない学生にはやや負担感があったかと考える。この点については、ペアで質問を考える等の工夫の必要がある。また、この授業の次年度の計画としては、自主的な授業への取組を促すために授業時間と授業外時間との学修時間のバランスを変更して授業設計を行う予定である。</p>																		
<p>4 教科書、教材の作成状況</p> <p>(記述式：300字以内)</p>	<p>教科書は作成していないが、教科書に準じた教材として、担当の授業時に講義概要を記したレジュメ及びプリントを配付するほか、プレゼンテーションソフトによるスライドを作成し、講義内容を理解しやすい環境を、ICTの活用を行いながら整えている。</p> <p>また、今後は保育現場でのピアノを使った音楽表現の指導を想定し、コードを利用したピアノの簡易伴奏を保育者自身で自由に行えるような教材及び指導法の確立を行うべく、自作の教材を作成する予定である。</p>																		
<p>5 学生の指導（課外活動・厚生補導等）</p> <p>(主要10件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td>2022年度</td> <td>吹奏楽部 顧問</td> </tr> <tr> <td>2022年5月</td> <td>ふかがわスプリングフェスタ 指導・引率</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> </table>	2022年度	吹奏楽部 顧問	2022年5月	ふかがわスプリングフェスタ 指導・引率														
2022年度	吹奏楽部 顧問																		
2022年5月	ふかがわスプリングフェスタ 指導・引率																		
<p>6 その他</p> <p>(主要5件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td>2023年3月</td> <td>本学FDワークショップ 担当：グループ討議ファシリテーター</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> </table>	2023年3月	本学FDワークショップ 担当：グループ討議ファシリテーター																
2023年3月	本学FDワークショップ 担当：グループ討議ファシリテーター																		

研 究 業 績				
1 研究分野・活動 (記述式：350字以内)	<p>主たる専門は、音楽科教育学と保育音楽である。</p> <p>音楽科教育学では、これまでの現場での指導経験を生かし、音楽科の授業構成や音楽指導について、教育方法学の視点で授業内での教師と学習者との関係を分析・検討しながら、授業づくりに関わった研究を行っている。さらには、生涯学習の観点から、学校を含めた音楽的活動について、その在り方を考えている。</p> <p>保育音楽では、子どもの音楽的活動における保育者の音楽指導について、分析を行っている。特に、童謡やわらべうたの歴史的背景を研究しながら、保育活動への導入について関心をもち、教材としての更なる可能性を探っている。</p>			
2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350字以内)	<p>音楽科教育学は、現状では小・中・高等学校などの教育現場を離れた環境にあるため、各校種の研究団体との交流や学校を訪問しての授業参観等を行い、授業づくりなど授業に関する提案を行いたい。</p> <p>保育音楽では、令和4年度のゼミ活動で取り組んだ「絵かきうた」の教材化を進めるとともに、既にフィールドワークとしている童謡の歴史的研究や、各園で実施されている「わらべうた」の取組について調査研究を行い、歌や音楽、遊びなどの動きによる発達過程への効果等を具体的に研究していきたい。</p>			
3 研究助成等 (主要5件程度)	<p>(1) 文部科学省科学研究費 ・なし</p> <p>(2) 学内 ・なし</p> <p>(3) 学外 ・なし</p>			
4 資格・特許等 (主要3件以内)	<p>小学校教諭専修免許状(2002年3月, 北海道教育委員会)</p> <p>中学校教諭専修免許状(音楽)(2002年3月, 北海道教育委員会)</p> <p>高等学校教諭専修免許状(音楽)(2002年3月, 北海道教育委員会)</p>			
著書、学術論文、作品等の名称 (主要15件以内)	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称	要 約
(修士論文)				
音楽科における教授＝学習過程の諸相― 〈意味の伝達・解釈〉の視点による分析―	単著	2002年3月	北海道教育大学	本研究は、音楽とそれを享受する人たちとの関係を、「音楽の意味」やコミュニケーション過程の理論の視点から検討したものである。ここでは、教材として意味付けされている「音楽作品」に視点をおいて授業を分析し、教材化の考え方に一つの方向性を示した。また、教授＝学習過程のモデルを示し、学習者に伝達される教材としての音楽、教師のことは、身振りなどを意味の視点から捉え、授業における教授行為について整理を試みた。
(著書)				
「あすの授業」ジャンケン大会で校歌を 覚えよう～新入生への授業びらきには、 もう最高！～	共著	1995年4月	学事出版『授業づくり ネットワーク』	新学期のはじめ、新入生の音楽の授業では校歌指導が必須となる。今では、おしゃべりな校歌もあるが、オーソドックスな校歌は堅苦しく、その指導に苦勞する音楽担当者も多い。ともするとワンパターンになりがちな校歌の指導に、ゲーム感覚で楽しく取り組める方法を紹介する。
「あすの授業」オルゴールづくりで作曲 を楽しもう	共著	1995年9月	学事出版『授業づくり ネットワーク』	音楽科の表現領域の一つに創作の分野がある。創作といってもその範囲は広く、簡単なリズムや旋律を作って表現することや即興的に音を探して表現すること、歌詞にふさわしい旋律や楽器の特徴を生かした旋律を作り、声や楽器で表現すること、自由な発想による即興的な表現や創作をすることまである。そのなかで、この実践は「メロディーづくり」に視点を置き、最終的にオルゴールの音として再生されるという、よろこびと成就感にみちたものとして構成されている。

<p>「あすの授業」ハンドベルでアンサンブルを楽しもう～グループ学習にはうってつけ！～</p>	<p>共著</p>	<p>1998年5月</p>	<p>学事出版『授業づくりネットワーク』</p>	<p>音楽教師は、とかく教えたがる。合唱の授業は、教師が考える良い演奏にするために、自分の音楽性を押しつけるような場合がある。結果的に良い合唱ができ上がったとしても、学習者が自ら学び自ら考えて音楽活動をしているのであろうか。この実践では、個々の学習者が考え、主体的に動き、お互いに補いあい、高めあって学習が進んでいく。教師は、あくまでも補佐役、助言者に徹することができる。</p>
<p>「あすの授業」《君が代》のことを知ろう！</p>	<p>共著</p>	<p>2005年10月</p>	<p>学事出版『授業づくりネットワーク』</p>	<p>儀式での取組をめぐり、何かと話題となる国歌《君が代》。しかし、何に問題があるのか、そもそものような曲なのか理解していない現状がある。謎の多い国歌《君が代》に、音楽的な観点からの考察を加え、その全貌を明らかにすることがねらいである。</p>
<p>(学術論文)</p>				
<p>雑誌『赤い鳥』掲載曲譜を観る</p>	<p>共著</p>	<p>2001年9月</p>	<p>『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第52巻第1号</p>	<p>1918(大正7)年7月、夏目漱石の弟子である鈴木三重吉(1882-1936)によって創刊された『赤い鳥』は、三重吉の死による休刊の1936(昭和11)年8月まで発行されつづける。この雑誌は、創刊を前に配布したプリントのタイトルにも掲げているように、「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」としての役割を果たすこととなるが、後には文学のみならず、音楽や美術などにも関わって、児童芸術の先駆者的存在にもなった。音楽的分野に関することでは、1919(大正8)年5月号から作曲家・一般応募者による曲譜掲載が始まり、それは先の休刊期間をはさみながら、1932(昭和7)年8月号まで続く。本小論は、その音楽的分野としての、『赤い鳥』の掲載曲譜について考察する。</p>
<p>生涯学習の視点からみる音楽科教育—音楽振興法とフィンランドの教育思想をとおして—</p>	<p>単著</p>	<p>2009年3月</p>	<p>『北翔大学北方圏学術情報センター年報』Vol.1</p>	<p>過去3度のOECDによる「生徒の学習到達度調査」(PISA)で、日本の順位は低下し続けている。このため、従来から論じられてきた学力低下問題はもとより、「学力」そのものを問いなおす気運が生まれている。本小論は、これからの社会で求められる「学力」について、特にPISAの結果を踏まえ、国際比較で上位国であるフィンランドの教育しうに関連させながら考察する。そして、そこから導き出された理念を音楽科教育において適用するとともに、その姿を生涯学習の視点からとらえ直し、望ましい音楽教育のあり方を考える。</p>
<p>音楽振興法からみる高等学校学習指導要領の変遷—第6次から第8次学習指導要領「音楽I」の目標を比較して—</p>	<p>単著</p>	<p>2010年5月</p>	<p>『北翔大学北方圏学術情報センター年報』Vol.2</p>	<p>1994年に制定された音楽振興法は、生涯学習社会への移行を意識して、学校教育や社会教育などでの音楽学習について環境を整備し、我が国の音楽文化の振興を図ることを目的としている。このために、(財)音楽文化創造が設立されたが、その活動は主に社会教育の範囲内にあり、学校教育以外の場が中心である。一方、学校教育には、教育内容や学習事項の編成基準を示す法令として、学習指導要領が存在する。本研究は、音楽振興法の理念が学校教育に対して与えた影響を、学習指導要領の教科・科目の目標の変遷をとおして考えようとするものである。そして、生涯学習からの視点で学習指導要領を考察することにより、学校教育での音楽学習のあり方を見つめる。</p>

<p>音楽科教育における「音楽検定」の導入—自発的・自律的な学習をめざす教材として—</p>	<p>単著</p>	<p>2011年5月</p>	<p>『北翔大学北方圏学術情報センター年報』Vol.3</p>	<p>音楽は好きだが音楽の授業は嫌い、と言われて久しい。その要因の一つに、子どもたちの音楽的活動に関して、ともすると担当する音楽教員が自分の音楽解釈を押しつけ、創造する自由を奪うかのように指導してしまうことがあげられる。結果として、その授業は子どもたちにとって受け身のものとなり、達成感や楽しさが失われてしまう。一方、生涯学習のキーワードに「自発的意志」がある。自発的・自律的に音楽に接することは、その活動や行為自体に楽しさやワクワクした気持ちを感じる。本研究は、生涯学習の観点から音楽に関する学習成果の評価システムとして開発された「音楽検定」に着目し、音楽科教育における自発的・自律的な学習をめざす教材としての可能性を探る。</p>	
<p>音楽振興法からみる高等学校芸術科「音楽I」の実際—生涯学習社会における音楽の授業のあり方を探る—</p>	<p>単著</p>	<p>2012年5月</p>	<p>『北翔大学北方圏学術情報センター年報』Vol.4</p>	<p>日本における中学校、高等学校の多くに、吹奏楽部や合唱部に代表されるような音楽系部活動が存在する。そこには、授業以外で音楽を愛好し活動する場を求める生徒が多数在籍する。そしてその活動は、社会人になっても継続して行われる場合が少なくない。一方、学校教育では教科としての音楽の授業が存在し、小・中学校では音楽科として全員が、高等学校では芸術科音楽として選択者が履修し、音楽に関する様々なことを学ばせ、音楽的活動を行う。しかし、音楽の授業が、その後も継続した音楽の学びや活動を生み出したという話を聞くことは、残念ながら少ない。本研究は、特に教科として行われている音楽の授業に着目し、実際に行われている活動内容を生涯学習の視点で考察し、部活動のみならず音楽の授業での学びや活動が、卒業後も継続した音楽活動に結びつくものになるような方略を探り、ひいては生涯学習社会における音楽の授業のあり方を考える。</p>	
<p>「絵かきうた」の保育活動としての可能性を探る～保育実践演習での取組を通して～</p>	<p>単著</p>	<p>2023年3月</p>	<p>『拓殖大学北海道短期大学研究紀要』第3号</p>	<p>本学の保育学科では、保育実践演習の科目をゼミナール形式で実施し、担当教員の名前をつけたゼミ活動として行っている。令和4年度の筆者のゼミ活動は、研究テーマを「絵かきうた」として実施した。絵かきうたは、わらべうたの一種として分類され、「歌詞にあわせて線を引いて行くと絵がかける歌」と説明される。子どもの遊びとしての絵かきうたではあるが、純粋に学生たちも楽しめるものであった。本小論は、この絵かきうたについて、保育実践演習での取組を通してその魅力や効果を確認し、ひいては保育活動としての可能性を探る。</p>	
<p>【リカレント教育プログラム】第26回保育セミナー2022：子どもが育つ「遊び」と「学び」とは—幼保小接続の現状と課題</p>	<p>共著</p>	<p>2023年3月</p>	<p>『拓殖大学北海道短期大学研究紀要』第3号</p>	<p>本稿は、拓殖大学北海道短期大学保育学科におけるリカレント教育プログラム「第26回保育セミナー2022：子どもが育つ「遊び」と「学び」とは—幼保小連携の現状と課題」の報告である。講師及び本学保育学科の教員が、それぞれ分担して執筆したものである。そのうち、「まとめ」の項を担当し、本セミナーの意義と効果及び今後の展望について整理を行っている。</p>	
<p>研究業績（過去3カ年分）</p>				<p>国際的活動の有無</p>	<p>社会的活動の有無</p>
<p>著作数</p>	<p>論文数</p>	<p>学会等発表数</p>	<p>その他</p>	<p>無</p>	<p>有</p>
<p>0</p>	<p>2</p>	<p>0</p>	<p>0</p>	<p>無</p>	<p>有</p>

学 内 運 営 業 績		
1 役職、各種委員会等 (主要 10 件程度)	2022 年度	教務委員会 委員
	2022 年度	就職委員会 副委員長
	2022 年度	(自己点検・評価委員会) 作業部会 委員
	2022 年度	F D委員会 委員
	2022 年度	総合委員会 委員
	2022 年度	カリキュラム改定検討特別チーム 委員
学 外 活 動 業 績		
1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通じた活動 (主要 10 件程度)	2022 年 10 月～現在に至る	学校法人老久保学園 理事
	2022 年 11 月	北海道音楽教育研究大会十勝・帯広大会 高等学校部会 助言者
2 学会・学術団体等の活動 (主要 10 件程度)	1999 年 10 月～現在に至る	日本音楽教育学会 会員
	2000 年 6 月～現在に至る	日本音楽学会 会員
	2000 年 10 月～現在に至る	日本教育方法学会 会員
	2003 年 3 月～現在に至る	北海道芸術学会 会員
	2005 年 6 月～現在に至る	音楽学習学会 会員